

## 大海を渡った男 竹森明光（六三歳）

平成二十六年五月 日

豊岡市 山川 正朝

はじめに

竹森明光さん（六三歳）は、まだまだ現役で「おじいちゃん」という年ではない。彼の生き様に惹かれるものがある。竹森さんは地域の宝である「海」が大好きだ。

竹森明光さん、一九五一年に豊岡市竹野町（旧城崎郡竹野町）で生まれた。竹野町は、古くから北前船の寄港地として栄え、また景勝地として有名で、観光業と漁業が基幹産業のまちであった。

竹森さんは語る。

●子どものころ、山や海が遊び場 “生きる力” を身につけた毎日

「当時は、戦後からの復興過渡期の頃で、地域内の結びつきが今よりも強かった時代で、お腹が空けば、お茶碗を持って隣近所にご飯を食べに行くこともしばしばだった。特に祖父母の家に出入りすることが多く、親よりも祖父母と生活する時間のほうが長かった。」

「当時の遊び場といえば、山や海といった自然の中だった。おやつにニッキの木の根をかじったり、青井石の採掘鉱山跡地に残るトロッコに乗ったり。」  
「中でも一番楽しかったのが海での遊び。幼稚園児から中学生までが一緒になって素潜りで遊んだ。溺れそうになると年上のお兄ちゃんが助けてく

れた。年上の子が下の子の面倒を見て助ける。誰が言うわけでもなく自然と身についたルールだった。いかにして自然と遊ぶか。“生きる力” を身につけた毎日だった。」

●何になるかと問われれば船乗りになると答えた

このように目の前に広がる日本海で毎日のように遊ぶ日々の中、海に惹かれていくのは当然の流れであった。また、元々祖父が北前船の船乗りだったこともあり、祖母から「将来何になりたい？」と聞かれると、「船乗りになりたい！」と答えるほど、将来は海に出ることを夢見るようになっていった。

彼の父親は大工だった。この当時、子供の就職については親が決める時代だったため、彼はそれに反発するようになり、祖父母の家で暮らす時間がますます増えていった。

そんなこともあり、高校入学と同時に正式に祖父母の家（竹森家）の養子に入るようになった。

竹森さんは隣町にある高校の水産学科卒業と同時に、三井船舶系列の会社に就職して商船に乗ることになり、夢への第一歩を進み始めた。

ペルシャ湾航路一年三か月、インド航路一年半、マレーシア航路半年、オーストラリア航路八か月。そして、船会社を転職後、材木輸送船に乗って、中国、インドネシア、ロシア航路に就いた。

世界各地を航海する中で色んなも

のを見て、経験した。

夢だった仕事と隣り合わせにある死の存在。荷揚げ中の材木にぶつかり頭がもげたり、積荷の下敷きになってしまった仲間の死。貨物船をも切り裂き沈める「青い波」と呼ばれる嵐の激浪。生きていることの有難みを日々痛感した。

同じ船に乗れば上下も関係もない仲間同士。互いに助け合うのは当たり前のこと、幼少期の頃に学んだことと同じだった。

インドのゴアに寄港した際には、不思議な空気を味わった。街中にあふれるストリートチルドレン。彼らは物を盗む。善悪の判断以前に「生きる」為に盗むのだ。彼らから生きる強さ、粘り強さをひしひしと感じたのだった。

現地の人間ではない者が、彼らに物を与えるのは本来すべきことではなかったが、買えるだけのパンを買って渡してあげた。すると、彼らは小さい子どもから順にパンを配っていった。上の子が下の子を守り育てる。それは、自分の幼少期と重なって見えた。日本で暮らすことの裕福さに気づいたが、遠く離れた地で日本と同じ空気を感じ、どことなく親近感を覚えたのだった。

貨物商船の一航海は長く、日本へ戻ると長い休みをもらうことが出来た。

その休みを利用して、航海士の資格を取得するために尾道海技学院に入學した。三か月通っては航海に出るという日々を経ながら、とうとう甲種二等航海士（現在の三級海技士）となった。そして一等航海士まであと一単位

というところまでたどり着いた。

そんな二九歳のある日、母親の体調が悪くなったとの連絡が入り、地元に戻って母親の面倒をみることになった。少し落ち着いてから一等航海士になろうと思っていたが、続いて養父である祖父も体調を崩し、看病をせざるを得なくなってしまう。一等航海士への夢が断たれた瞬間であった。

### ● 船会社を退職、地元で暮らし始め結婚 三人の子どもを育てた

彼は、船会社を退職して、地元で父親の大工仕事を手伝いながら地元で暮らし始めた。そして、三一歳の時に結婚し、三人の子供を授かった。子どもたちには自分の経験を伝え、「働き口を日本で見つけることはない。世界で仕事を探せ。」と言って聞かせた。その通り子どもたちは各々旅行などで一度は海外へ出かけていった。

こうして子育てをしながら幸せな家庭生活を送っていたが、地元の海を毎日眺めていると海への思いは消えることがなかった。

### ● 五三歳のある日、「そろそろ自由にさせてほしい」奥さんは頷いた。再び海へ

結婚から二二年経った五三歳のある日、奥さんに一言伝えた。「そろそろ自由にさせてほしい。」奥さんは頷いてくれた。

まず一年間林業を学んだ。その後五年間は地元の竹野スノーケルセンターのスタッフとして海岸保全と海の

楽しさを子どもたちへ伝える仕事に就いた。やはり海での仕事は楽しかった。

定年後から現在までは、たけの観光協会の一員として、地域の海岸美化活動を行っている竹野海岸を美しくする会、誕生の塩工房のスタッフとして働いている。

海外等から流れ着く海岸漂着ゴミを回収して大好きな地元のを海を守っている。そして、流れ着く流木を燃料に日本海の海水で塩を作っている。

地元の地名にちなんで名づけられた「誕生の塩」は、不純物がほとんどなくてほのかに甘い。

「一度地元から離れて外の世界を見たことで、変な島国根性が抜け、狭い世界観がなくなりました。そしてより一層地元のことが好きになりました。そんなふるさとの大好きな海と共に生きて守り遺していきたい。」

### ●話を聞いて思う

竹森明光さんの話はいい。世界の海に渡った男の姿は泰然としている。島国根性から抜け出ている。

竹森さんにはいつも「生きる」すべ、強さのようなものを教えられる。これまで地域の下の子が上の子に教え伝えられてきたように自分もその関係性の中にいるのだと感じる。

次は自分がまた下の子（世代）に色々なことを伝えていきたい気持ちになる。

